

質的研究方法を用いた 博士論文作成指導の技法 メンタリングプロセスに焦点を当てて

「博士論文を書くプロセスは自分との戦い」と、昨日会った院生が何度も言っていた。よく聞く言葉である。でも、ちょっと待ってよ、と、この特集の原稿を読み込んでいる私は思った。戦いを意識しすぎると、肩に力が入りすぎ、研究テーマに向かうためのエネルギーが、頭の中の仮想敵との戦いに費やされてしまう恐れがある。

研究テーマを見失わないで、シンプルにデータと向き合うことは難しい。本特集号には、質的研究方法の第一線の指導者に多数ご寄稿いただいたが、一様にその難しさに触れている。オリジナリティのある概念を生み出すためには、データの力(すなわち現象のリアリティ)と、自分がデータから普遍性を読み取り、概念を創り出す力を信じるのが前提である。その信頼がもてなければ、院生は、学位がとれるかどうかということへの不安に押しつぶされそうになり、その不安と戦うことになる。それは自分の影と戦うようなもので、混乱や焦燥を招くことはあっても、創造的にはなりにくい。

だからこそ、教員は院生に基盤を提供する。根拠のない万能感ではなく、自分に何ができるか、どの部分はさらに学習が必要かという現実的な確信を積み重ねるための基盤である。木下氏は、院生の立場の不安定さに配慮しつつ、基盤となる能力の醸成が可能な教育環境の必要性について、「分析基礎力如何によって質的データの解釈に大きな差が出る。しかし、この学習が不十分なまま実際に博士論文の作業に入ると、いわば実践本番になり院生本人はむしろ悪戦苦闘で大変であるが、指導する教員の負担が格段に大きくなる」(p.382)と述べる。山本氏は、院生の研究における発想を支えるのは確かな論理性や研究方法の知識体系であることから「概念化や質的研究の中での発想のためには、多かれ少なかれリスクを負って、これぞと思う方向に概念化を冒険してみるようなことが必要とを感じるのだが、これが初学者にはたいへん勇気のいることのようにだ」(p.391)と指摘している。

基盤となる能力の醸成には、院生と教員との間にパートナーシップが不可欠で

ある。パートナーシップでは対等性が基本であり、相手に強い関係性とは異なる。麻原氏は、院生が発想しうる院生-教員関係に注目し、「学生が教員と共に創る関係であることを認識できれば、自分は1人ではないことを理解し、自由な発想も生まれてくる」(p.407)とする。さらにタナー氏は、創造的なパワーをもたらす指導方法の具体的技法に触れ、「学生が最初の段階のコーディングを行なってきたとき、そこから重要なテーマを選ぶ作業に時間を費やすようにします。ここがうまくいくと、学生は次の段階に比較的スムーズに進めます。(中略)学生が自信をもって、『これが重要なテーマなのだ』と言えるようにします」(p.373)と、院生-教員間で、まさにエンパワメントが起こる瞬間の技法を説明している。グレッグ氏は、院生同士の相互作用について、ゼミが「学究的なケアリングの場」になることで、「自由な発想や新しいものの見方が可能になる」(p.412)と述べている。教員は、院生の思考が「飛躍できないこと」に焦れているのではなく、あらゆる関係性を通して院生が「自分には創造的な発想ができる」と思えるように、院生をエンパワメントしている。

中山氏が指摘するように、院生の学ぶ姿勢を支える創造的な時間が得られにくくなっているという、看護学の大学院教育の現状への危惧は深刻である。氏は、「現在では、働きながら博士課程で学ぶ学生が増え、一方、看護系大学の教員たちに時間的にも気持ちの上でも余裕がなくなってしまう」とし、「博士課程の学生が、研究に専念できるような仕組みを看護学分野は本気になって考えていく時期に来ているのではないか」と述べる(p.415)。いくら教員が院生をエンパワメントしようとしても、それを受け入れ、自分の中にある希望に向かうエネルギーが院生になれば、教員にはどうしようもない。院生は博士論文を書き終わるやいなや、即戦力として論文指導に携わる。教員は自身の指導への具体的示唆を受けないままに、自分の経験だけをもとに大学院教育にあたる。これが今日の現実である。

この状況の中で、教員はどこからエネルギーを得ればよいのか。この研究プロ

ジェクト自体が、私の大きなエネルギー源だった。悩んでいるのは私だけではないという連帯感、課題の共有、大変であることへの共感。しかしそこにとどまらず、どんな概念を援用し、状況を理解し、具体的な指導に反映させればこの状態を突破できるのかという知的探求があって初めて、新たなエネルギーを得ることができた。看護学の大学院教育に携わる教員をエンパワメントするためのネットワークをつくることができれば、どんなによいだろう。

夢をみている暇もなく、今日も別の院生がやってくる。今日は飛べるだろうか。抽象度を上げた思考ができるだろうか。特集の原稿を読み終えた私は、どんなに小さくとも院生の思考からオリジナリティを見つけ出し、院生が顔をあげて生き生きと語れるようにできるだろうか。祈るような気持ちで夏空を見上げている。同じような気持ちで、この空の下にある多くの指導教員と院生に、本特集がパワーとなりますようにと、願いながら。

企画：萱間真美(聖路加看護大学教授)